

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年
4月号

毎月23日発行
通巻416号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



在りし日の双葉館 2003.4.6 齋藤 正宏さん撮影

ありがとう 双葉館

双葉館の変遷

双葉館は、大倭の歩みと共に二度三度と姿を変えつつ、人間のくらしの土台となる住居の役割を十全に全うし、平成十七年一月十七日、法主様奥津城整備に伴い、解体される運びとなった。

双葉館の建物は、元を辿れば大倭神宮の現在の入口の所に在った練武場(源平道場)として誕生した。この練武場を解体し、現在の大倭印刷のある所に青山日元さん、反保隆臣さんの手によって改築起工したが、昭和二十八年四月八日の事である。同年八月二十三日竣工(建坪二十五坪)。法主様によって双葉館と命名された。この場所での役割は当時邑人の増加に伴う住宅兼作業場であった。昭和三十四年七月十七日、今年一月まで在った場所に再び双葉館を移築起工し、邑の女性や子供達、後にはF.I.W.C.のキヤンパー等も入居し共同生活の場となる。

平成六年より高橋良美、見田暎子両氏が住人となり、各地より来邑する人々の憩う場となった。ここに双葉館に感謝の意を込めて特集号を組むことにした。

(取材協力 青山日元さん 李章根記)

矢追 盛賢 (あじさい邑)

この度、日聖師の奥津城整備のため、私も含め多数の方々の生活の場として大きな役割を担ってくれた双葉館が止む無く解体されることになった。建てられたのは多分昭和三十年代の半ば頃なので四十五年は経っていたと思う。質素な造り

であり建築物として今迄よく耐えてきたものであるが、無くなってしまうとなると、やはり感慨深く寂しい思いである。双葉館が建築された当初は、小中学生を中心とした子供達五、六人と、母親役でもあった今は亡き澤口志なさんが寝食を共にしていた。志な母さんには、我々の炊事、洗濯等身の回りの面倒を見てもらっていた。特に食べ盛りの子供達の食事については、当時の大倭の経済状況を考えると随分と苦心されたのではと、今更ながら感謝の気持ちで一杯である。またその頃同居人として久子のおばあちゃんや精神病のまあちゃんが居た。まあちゃんは夜中になると大声で奇声をあげ、我々の生活に緊張感を与えてくれた。兩人もすでに霊界へ旅立たれたが、今となれば全て懐かしい思い出である。

我々を育ててくれた双葉館に感謝すると共に、近い将来新生双葉館が新たな役割を担って再建されることを祈念申し上げたいと思います。



中島佐栄子

(あじさい邑)

双葉館にくらしはじめたのは記憶が定かではありませんが、確か小学校の三年生ぐらいだったと思います。志な母さんと女子の子供四、五人が新しく建てられた家に住めるようになって大変嬉しかったのを思い出します。食事は男女ともに一緒に食べて、最初の頃は夜は女性だけでした。部屋数も沢山あって台所はカマドでご飯を炊いたり、お風呂を沸かすのも、山から枯木を拾ってきて焚きました。山からしばを取ってくるのは子供達の役目で、学校へ行くまでにも当番があつて「ご飯を炊く者、瑞光庵に井戸から水を汲んで運ぶ者、旧



昭和39年頃、双葉館前の楠↑
奥は未完成の矢追房子さん宅

拝殿のトイレ掃除をする者と、ひと仕事をしていたものでした。寒い時は手ががじかんで、あかぎれもできて痛くて泣きたいくらいの時もありました。高校生位になった時、交流の家の建設のためF I W C 関西委員会の学生さん達が大使に出入りするようになって、賑やかで活気があり若い旋風をふきこんでくれました。それに伴い双葉館にもいるんな人達がそれまでも増して訪れて来たり、あじさい邑で腰をおろして生活される方も少なくありませんでした。

手取屋のおばさんの賄いで大勢の人の食事をつくっていたとき、同じ釜の飯を食べた大倭一家族や仲間がいつい出来ました。その料理のなかでも鰻の蒲焼に見たてたちくわの蒲焼、これがまたおいしかった！まさに「おふくろの味」でした。少ない予算でのやりくりのご苦労があつたと思います。双葉館は「来るものは拒まず、去るものは追わず」と法主様がよく言われていた、誰が来ても皆んな仲良く、受け入れられる寛容さと、忍耐強い人間としての育成の、理屈抜きの実践の原点になりました。

私はこの双葉館から結婚を機に、巣立つことができなくなりました。ふる里でもある双葉館の、姿・形はなくなっても私の心には永遠に消えることはないでしょう。有難うございました。



山崎波留茂

(あじさい邑)

いつから双葉館に住まいする様になったのか、

幼稚園はそこら通った様な……。その頃は、今奥津城のある側の裏山は暗くうつつとした感じで、小さな豆球のような灯りしかなかったトイレは怖い所ではなかった。夜中のトイレがうまく行けなくて怒られた事や、だしじやこと炊いた大根はおいしくなく大嫌い、全然食べられなくつらかった事、そして寒いといつてはよく泣いた事。あと小学校二年くらいの夏休みに日射病になり、長い間、志な母ちゃん達に看病してもらった事。唯一嬉しかったのは、盛賢さんに学校で習ったほうれん草の油炒めを食べさせてもらい、とてもおいしかった事が心に残っています。

遠い昔の事なのに忘れられない思い出です。



芝 香須弥

(あじさい邑)

『双葉館』にいつの頃からかわからないが、もうかれこれ三十年近く『双葉館』を外からは見ているものの、中へお邪魔したことがなかった。解体されると聞いて、もう一度幼い時の思い出が一杯ある。『双葉館』を見ておきたかった。

私が幼かった頃とは中は随分変わっていたが、当時の面影はそのままであった。

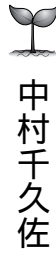
『双葉館』と言ってすぐ思うのは、今は亡き志なかあさんで、思えば『双葉館』の母親的存在であった。当時はカマドに薪をくべて御飯を炊き、私も炊事場で何かを手伝いながら色んなことを覚えてもらった記憶がある。学校から帰ると木の枝を拾ってきてお風呂を沸かしたり、みんなが食事する長机に、お茶碗などを並べたりとお手伝いした。また真中に筋の入った麦御飯が懐かしくもあるが、おかずは大根の煮物が多く、大きくなつてから、しばらく食べる気がしなかった。小さい頃はよくひきつけを起こしていたため、「かずみちちゃんひきつけを起こすから」って、おかずを減

らされていたのを今も覚えていた。

私はなぜか『双葉館』によく寝泊りしていた。世間一般から見るとおかしい事かも知れないが、みんな他人なのに家族のような生活をしていて。親子のようであり、兄弟のようであり……。そのような環境の中で育った私だけがそうだったのかも知れないが……。

『双葉館』には色々な住人がいて、志なかあさん、まあちゃん、久子のおばあちゃん、美登利ちゃん、盛賢さん、岸野さん、佐栄ちゃん、みつちゃん、他多数の人が入れ替わり立ち替わり生活していた。そんな人達との関わりの中で、色々なことを学んで大きくなった。

みんなのお陰で今の私がいる。そんな感謝の気持ちと、みんな同じ人間すべての人達と仲良くしていきたいという思いは、私の育った生活環境から培われてきたものかも知れない。



中村千久佐

(あじさい色)

私の『双葉館』在住歴は、二、三歳頃から小学三年生ぐらいまでの約七年と学校出て結婚するまでの三年半ぐらいで、トータル十年ちよつと在住していたことになりました。

その頃の幼稚園等への送り迎えは、『双葉館』にいるみんなの母親的存在であった志なかあちゃん(故澤口志な)でした。

先日、母に聞いたところ、二、三歳頃に、瑞光庵から帰る時、母と一緒にいた私に、志なかあちゃんが「来るか」と言っ手を出したら私がついていったらいいのです。それから家に帰って来なかつたが母が言っていました。それが始まりで私の『双葉館』生活がスタートしたのです。

当時は一番幼かつたので、みんなにボールの代わりに投げられたり、羽子板で羽根付きをして羽

根が顔面に当たって左目下に怪我をしたりしながらも、おもちゃに不自由を感じない遊びをしたように思います。食事時は食べるのが遅かつたのでおかずもよく取られました。おかずといつてもめざし一匹、蒲鉾一切れ、それに麦御飯というもので、長机を並べて何人も一緒にいただきました。

親が誰か、兄弟は誰かなんてよくわからなかつたけれど、色々な人と兄弟のように生活しました。姉もしばらく一緒に『双葉館』にいましたが、姉妹とはまったくわからなかつたように思います。誰かが病気をしたらみんなに移り、何人かで寝込んだりした事もありました。

私は、よく志なかあちゃんのエプロンの端を引っ張って歩いていたので、みんなに「金魚のふん」と言ってからかわれていました。今となれば、食事、遊び、着る物と何一つ満足なものではなかつたけれど、みんなと喧嘩しながらも楽しく生活できたことが懐かしく思います。

最後にみんなを育ててくれた『双葉館』と、親代わりになり世話してくれた志なかあちゃん、そしていつも温かく見守ってくれた住人の方に感謝します。有難う。『双葉館』。



杉本 順一

(あじさい色)

双葉館。今思えばそこは当時の私の道場だったと言える。

大倭では「一生が修行」とおそわってきたが、ある日の夜、たぶん京都の大学から帰ってきた岡田美登利さんと私が食事していた時、酒に酔った丸さんが六尺程の棒を持って食堂に来た。

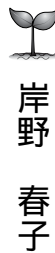
大声をあげながら私達の食卓の真上の天井をつきぬいた。電灯が明るくなかつたので落ちてくるホコリも気になることなく二人で黙って食事をつづけた。丸さんはそのあと声をあげることもしな

く食堂を出ていった。

四十年たつても天井の穴は残っていた。当時は網戸がなく、ズボンの上からでも容赦なく刺してくる蚊が線香にいぶされてポタポタとミソ汁に落ちてきた、楽しい思い出だ。

痛さをおぼえる蚊たちを、私はファントムと名付けて(ベトナム戦争で使われた米国の戦闘機)たっていた。

今、形を消した双葉館も永遠に消えることのない霊界の相となつた。またここを終の住処とされた久子のおばあちゃん、志なかあさん、日置のおばあちゃん等の邑人達にただただ感謝の気持ちを持ちつづけたいと思っっている。



岸野 春子

(あじさい色)

大学三回生の頃は交流の家建設のワークキャンプだけを知っていた。卒業近くにきつかけがあつて大倭に遊びに来るようになり、いつもまず双葉館を訪ねる。双葉館は人間の坩堝くわうという感じ。

大阪の豊学校に就職して富雄から通勤したが、週末は双葉館に来ていた。一年経つ頃、下宿先から出てほしいと言われ、双葉館の志なかあさんと澤口志なさんに相談すると、事も無げに「私の部屋に来たらええやん」と言う。娘の道つちゃん(高井道代さん)と一つ布団で寝起きするようになった。やがて別室で道つちゃんと布団を並べ、次には居候の身で自分の部屋までもらつた。

豊学校に五年勤めた後、二十七歳で新設の菅原園の寮母となる。財布一つの一門になるつもりだったが、一門という気持で経済は自立してやれと言われ、それまであまり変わらなかつた。

結局、双葉館では合わせて十年ぐらい暮らし、言い尽くせないほど多くのことを勉強させてもらった。深い感謝の気持ちをもって、拍手合掌。



林 修三

(京都府八幡市)

一九九七年から二〇〇三年迄、本当に苦しい時期を、「双葉館」とその住人高橋良美・見田暎子両氏、そしてそこに集う大勢の方々に支えられた。心より感謝したい。多くの喜びがあり、多くの宴があった。山海の珍味と甘し酒の前に食べ、飲み、且つ、唄った。四季を通じて、「双葉館」の移ろいも経験できた。窓から桜を愛でた。暑い夏の夜、皆でもっと熱く語った。秋はすだく虫の音の中、酩酊する良美さんの説教を聞いた。冬、鍋を囲んでの皆との宴は楽しかった。温かかった。超人的な暎子さんと良美さんの活躍に何度驚かされ、救われたか……。今、この地上から忽然と姿を消した「双葉館」は、正に私にとっての「駆け込み寺」であり、「オアシス」であった。

「双葉館」は、大倭の歴史に各々の時代の各々の人々の想いを刻んで、大倭暦六十一年早春に静かにその幕を閉じた。

かき暗す 涙も今は 乾きたる
厚き情の 双葉の館に



齋藤 正宏

(福井県福井市)

双葉館は、法主さんが帰幽された後、以前より足繁く大倭に通うようになった私の、いわば定宿のようなものでした。寝泊まりしていたのは、「交流の家」でしたが、ここ十年近くの間、沢山の私たち、大いに語り、笑い、食べ、酔い、時に歌うといった出会いを、腹一杯、ご馳走していただいた、いわばもうひとつの「親元」なのであります。

成正坊さんの前であがる柏手。裸電球のもと、玄關引き戸に張り出された様々な催し案内。床の部分と天井とで明らかに太さの異なる柱や梁。た

くさんの洗濯物が干されている窓辺。そして、そこにはいつも、時間の合間を縫うように働く、良美さんと暎子さんの姿がありました。

瑞光院に馬酔木の花がこぼれる頃、奥津城へと向かう空堀の土手は、その向うに建っていた双葉館の分だけ、明るく視界が開けておりました。何も無い空き地と変わったその場所を眺めておられますと、笑いや歓談する声をとまなつた懐かしい味わいが漂ってくるようで、知らず知らず両の手を合わせておりました。

かたちあるものはすべて、役目と果たし終えれば姿を変えゆくとか。

ならば、この大倭で子供たちを育ててきた双葉館が姿を消すという流れを、どう捉えておいたらよいのでしょうか。双葉館最後の卒業生？でもある私には気になるところです。



藤本 宏秋

(京都府舞鶴市)

私にとって双葉館と言えば、高橋良美さん・見田暎子さんのお二人です。法主様との有難いご縁をいただいたのは、大倭五十年金鶏祭の日(平成六年十二月四日)だったのですが、ちょうどその頃、お二人は双葉館に住まわれたようです。

その当時、なぜか偶然、仕事の休みと大倭の行事の日が重なり、十二月・一月と毎週立て続けに大倭神宮や紫陽花邑へ通っておりまして。ところがその後、タイミングが合わなくなり、足を運ぶことが出来ない月日が二年間ほど流れました。そんな時、大倭とのご縁を再び結んでくれたのもお二人です。舞鶴で新井英一さんのライブがあり、偶然そこで再会し、「また大倭に帰って来てね」



夜の双葉館 齋藤正宏さん撮影

という温かいお言葉を掛けていただいたのでした。

それからほぼ毎日、第二日曜の禊会に通うようになり、その後は決って双葉館での宴会でした。そこでは生活と一体になった大倭の教えをホントにたくさん見せていただき有難いことでした。

今、正直に思っていることは、法主様を始め、双葉館のお二人、そして大倭の皆様、ただ自分は甘えていただけじゃないか、という気持ちです。

生活の中での実践、ご縁をいただき丸十年にして、『加美のまにまに』(新装版を作っていたら嬉しく思います)を読みながら、これからが出発という気がしています。皆様、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



高橋良美・見田暎子

(あじさい邑)

三十数年前、交流の家で初めて法主さんにお会いして依頼、時を重ねる度に深く心惹かれて、法主さんの晩年にはおそばにいたい、と決めていた。南半球からの旅の後、北海道の二風谷に住んでいた時、法主さんの両足が丸太のように腫れてもどらないとお聞きし、即座に大倭に帰ることにした。平成六年十二月初め法主さんにお便りし、十二月二十一日に大倭入りした時、双葉館が空いていた。私たちの急な申し出に困って、大倭神宮の社務所に住まわせようとして、鶏嶽大加美の了承を得ていたという法主さんは、「神ながらや」とよることで下さった。以来十年、実に快適な双葉館生活であった。

春は桜。六畳の部屋に寝ころんで花見が出来、

とりわけ夜桜は美しく、一日の疲れを忘れた。床の間の柱に寄りかかって窓の外を見れば、成正坊塚と威厳ある桑の大木。春から夏は若葉が見事で、桑の実も美味かった。夏は玄関前の大きな楠の樹が、日傘の様に強い陽射しから守ってくれ、あちこち開け放した窓からは涼しい風が吹いて、十年間クーラーなしにすこせた。秋は朝、窓を開けると、どっと流れこんでくる金木犀のいい香り。外界をさえぎる緑のカーテンのような大きな木犀。いろんな虫たち、蟻・蜘蛛・コオロギ・百足からスズメバチまで自由に出入りし、屋根裏で猫が子供を産み、鼠が走り廻り、蛇まで住んでいた双葉館。玄関にも窓にも力ギなしで、いろんな人たちが出入りしてくれた双葉館。六畳の部屋にたくさんの人たちがひしめいて、一緒に食べ、飲み、歌い、話し、さんざめいていた双葉館。四畳半で治療していると子供たちが廊下を走り廻る音がよく聞こえ、玄関わきの三畳で泊まった友人たちは、こんなにくっすり眠れる部屋は珍しい、と言う。患者さん達も、とてもよるこんでくれた。楽しかった十年間。

法主さんのお世話をさせていただきたくて大倭あじさい邑に住み、法主さんが帰幽されてからは、霊界の法主さんとお会いしながら、双葉館ですこした気持ちになった。仮奥津城が出来た時、双葉館のトイレからまっすぐ墓標が見えて、それまで単なる裏山だった場所が急に大きな存在となっていた。皆でお墓を掘った時、法主さんの残された写真を見て、奥津城完成の時は双葉館のなくなる時だと納得しながら、十年の年月を過ごさせていただき、有難かった。

寿命を全うした双葉館の最後の住人となれたことを、心より感謝します。

双葉館、ほんとにどうも、ありがとう!!

中国広西チワン族自治区、桂林にあるハンセン病回復者の生活する平心村にて

FWC中国ワークキャンプを通して感じる

総リーダー 五十嵐 美穂子
(神戸大学大学院3年生)

「リヤオボーありがとう」
私は無意識のうちにこう言っていました。彼は、05・2・9〜19に行われた今回のキャンプで亡くなった村人です。

今回はバレンタインデーもはさんでいるという事で、レクリエーションリーダーの藤野万里江がチョコレート作りの企画をしました。何人かでワイワイと楽しく、日本から持ってきた生クリームとチョコレートで、おいしいトリュフをつくりました。それをもつて、グループに分かれて、村人一人一人に届けに行きました。

この時期はとても寒いので、村人は何人かで集まって火を囲んでお茶をしています。そのため、誰が誰の家で、誰に渡したのかを把握するのが難しい状況です(毎回行くたびに誰かが引越しをしています)。だから村人の2人をリーダーとした2つのチームに分かれて、チョコレート配りに行く事になりました。みんな嬉しそうな笑顔で受け取ってくれ、「おいしい」と言ってくれました。私も嬉しくなりました。

その時、トイレに行こうと、ベッドから落ちて怪我をしていたリヤオボーと出会いました。彼は言葉を失い、「ウー、ウー」と必死に何かを訴えようとしていました。頭から血を流しており、体が冷え切っていたため、消毒をし、カイロを張り、壊れた窓ガラスの修理を行いました。「彼はもう長くないよ」と村人達は諦めていました。

次の日は茶話会を行いました。それぞれ出し物を披露し、村人達にはシチユーを振舞いました。茶話会后、来れなかった村人達の所へシチユーを配りに行きました。リヤオボーは食べようともしませんでした。

次の日、リヤオボーは一人ぼっちで冷たくなってしまっていました。この日は、学校の都合で、広西師範大学の学生達6名が村を出る事となっていたため、彼らを見送り、必死で残った屋根の修理ワークを行いました。6日間という短い期間の中で、そのうち前半の2日間は雨で身動きがとれず、ワークが終わるかすぐく心配でした。

この日の夜、皆でお酒を飲みました。我慢していたそれぞれの思いが爆発し、みんな声を上げて泣きました。原田僚太郎君が、リヤオボーの家に落ちていた彼の母の手紙を読み上げました。その感想を、キャンパーの今岡亜美はFWCの掲示板でこのように述べていました。

【ハンセン病になり、村に来て……リヤオボーは両親に迷惑をかけたくないために一度も親の元に戻らなかった。彼の母が彼に宛てた手紙には、息子を想う母の気持ちが強く強く書かれてあり、



胸が熱くなりました。村人たちが受けてきたハンセン病に対する差別、死という現実、全てを受け入れるのはすごく難しい。けれど彼の死から、村人とキャンパーの関係はずっと近くなった気がします……。

昨年の2月のキャンプでは64名いた村人も、今回で50名となりました。昨年11月の下見の際も、村人が亡くなっており、行った日に鍋を囲みました（この村の風習で、誰かが亡くなると、その日と、次の日はみんなで肉と豆腐と野菜をいれた鍋を囲みます）。

行くたびに減っていく村人。下見のときも、泣きながら子供が駆けつけていました。今回は、リヤオポーの娘さんと一緒に泣きました。彼女はこの村へ初めて来たそうです。桂林市に住む彼女は私に電話番号を教えてくださいました。私は次回行くときは、彼女のところにリヤオポーの写真を届け、いろいろとお話しを伺いたいなあと思っています。

亡くなった彼に何が出来たのかは分かりませんが、でも、私達は彼から目に見えないすごく大きなものをいただきました。彼は、私達の心の中ではずっと生きています。

村人達は「死」というものを素直に受け止め、誰も泣いたりしません。ハンセン病から快復しても、ずっとこの村で住み、誰にも知られる事もなく幕を閉じる人生。それでも強く生きてる村人たちを、私は素直にすごいと思います。いろんな仲間、家族から差別されてきたのにもかかわらず、突然来た、わけの分からないキャンパー達を、日本人、中国人と分け隔てなく温かく迎え入れてくれます。

私は、なぜかここになると、普段あまり感じない、「おいしい」「たのしい」「うれしい」「かなしい」……

い」が素直に現れます。ワークをしながら、協力をしあい、無事完成したときは国籍、年齢関係なくみんなで心から喜びます。そして「ありがと」という気持ちでいっぱいになります。」

風ぐるま 地域の歴史を残すということ

北海道小樽市
守谷明宏



はじめまして、北海道小樽市に住む穀象山人（ごくそうやまびと）こと守谷明宏です。大倭のホームページで掲示板を見ている人はご存知かも知れませんが、大方の人にとっては「誰その人？」と思うのではないでしようか。

大倭会の発足の時から会員になって、もう21年経ちましたが、大倭紫陽花邑には住んだことは一度もなく、大倭紫陽花邑を訪ねた事も、1987年を最初に、1988年、1999年、そして今年1月の4回しかありません（掲示板では、10数年ぶりと書いてしまいました。嘘つき守谷でした、すみません）。知り合いもいませんでしたので、毎回邑の雰囲気を感じて帰るだけ。とはいっても、初めての時はたまたま月次祭だったので旧拝殿で参加させてもらったり、次の時には大倭会総会と懇親会にも出席しました。（その時、小樽出身者がいてびっくりしました）

今年1月に訪ねた時に、掲示板で知り合った青山さんに会い、何人かの人と会話をさせていただきました。21年目にして、ようやく大倭のみさんに顔をお見せできたということになります。

そんな私です。この「風ぐるま」のコーナーへ書く話題は何もない。特に何かをやっている訳でもなく、札幌通いのサラリーマン。悩んだ結果ですが、私の趣味でも聞いてもらいましょう。

私の生まれたところは、北海道中央部にある小さな町雨竜町というところ。京都在住のフオーク歌手高石ともやさんの実家のある町といえれば分かりやすいでしょうか。この町は、元々四国徳島藩の殿様が拓いた農場だったところで、祖父は日露戦争徴兵忌避のため単身四国から北海道に渡ってきて、この地に落ち着きました。

家の周りは蛍の灯りと蛙の鳴き声がかたまるような痩せた田園地帯。私の小中学時代、床に臥せていた父から先祖の話や苦労話を聞きました。父の病名は、男性にとつては罹病例の少ない乳がんでした。

そんな環境で育ったせいとか、地域の歴史などに興味を持つようになりました。それは、俗に言う「偉人伝」とか「小樽市史」といったものではなく、偉い人の下で働いていた人々や、自分たちの住む町の一人一人の歴史です。「ここに本当の歴史あり」と勝手に思っています。

どんなに有名な建物でも、発注者の名前は残っても苦労して作り上げた大工さんの名前が残るのは稀です。本当に作った人は大工さんなのに。そのような市井の歴史をきちんと残しておきたいと思うようになったのです。歴史的遺産を動けるよ

うにして保存するのを「動態保存」、住めないけれど古い建物を保存するのを「静態保存」といいますが、市井の人達の歴史を残す作業を、私は「想態保存」と自分勝手に名づけています。

私の住んでいる地域を販売エリアとする地方新聞販売所の社長は、小樽運河保存運動という市民運動と一緒に活動していた親友です。私のひとつ上で、今年50歳になるのですが、彼は保存運動がきっかけで地域の歴史発掘に興味を持ちました。彼の販売所では、独自のPR紙を毎週折込で配達していて、そこに販売エリアの歴史紹介記事を企画、約2年に亘った連載記事を私が書きました。毎週お年寄りに会い昔話を聞き、図書館等で裏づけを取って記事にしました。連載は6年前に終了しましたが、地域調査は数人で今も継続しています。

北海道の歴史は江戸中期から残っていますが、実際はアイヌの人達が築いた長い歴史の上に成り立っています。アイヌの人達について書くとは紙面がないので省略しますが、彼らの歴史は口伝でしたので文書として残すことがなく、地域毎の歴史が残っていないようで残念です。

私の住む地域の歴史は、和人（大雑把な言い方ですが、本州の人々）による鯨漁によって栄えています。稲荷神社の床に穴を開け狐が入れるようにして供物の食い散らかし様で漁を占ったように、その信仰は自然に対しての敬虔な想いがあったのではないかと思います。アイヌの人々の宗教観は、自然に対する敬虔さがより深いと同時に、神は我々と共に生活しているという共生観が強くあるように感じます。

私達の住む地域に今でも多くの人々が住んでいるのは、テレビ漫画の主題歌ではないですが、ご先祖様達が「仲良く喧嘩」して生活してきたから。

仲の良い家庭がたくさんあって仲の良い地域ができて、仲の良い地域がたくさんあって平和な町が生まれ、平和な町が集まってこそ、平和な日本が生まれる。皆が仲良くしなかつたら平和は生まれないうということ。法主さんのいう「みんな仲良うに」という言葉が浮かびます。

地域の歴史を大切に残すということは、「仲良く喧嘩」したことを忘れない、そしてこれから「みんな仲良う」暮らしていくことを忘れないことだと思っています。

（まとまりのない文章でしたが、うまくオチがつけられたでしょうか）

ボランティアグループ「あじさいの箱」 総会資料より

H17.3.26

親の背中を見て子供は育つ

代表・且田容子

花好きには発見に満ちる、散歩が楽しい季節になりました。

あじさいの箱を40歳から始めて64歳になりました。最初から春休みに総会を開こうと決めたのは、子供達にも施設訪問に参加してほしいからです。その頃、あじさいの箱の仲間達の子供は小学生ばかりでした。重度の障害を持つ人達の施設を訪問して話し掛けるのも親の後ろに回っていた子供達が、次の年には自分から話し掛け、車椅子の手助けをしたり、バザーにも参加してくれました。今では福祉・介護関係の仕事に就いてお年寄りのお世話をしたり、看護師や助産婦の勉強を病院で働いてくれています。親の影響はすばらしい結果を生みます。「口で言うより目で教え」と、長女が生まれた時、父（故森下新蔵さん）から教えられた言葉です。

「寸沙」第63回を読んで

匿名希望

「来るべくして来た」という表現について、世間では大倭教の機関紙であるとみられる本紙においては、極論をいえば、この表現は選民思想につながりかねない幅の狭さを感じさせる。

法主さんが、こういう運命論的表現を使う場合に、「人知の計り知れない、もつと幅の広いところまで全てが決定されているのだから、人は何をすることも自由である」ということを前提にしていたのではなからうか。そして、「決められている」ことではなく、「全てが決められているなら何をしても」自由である」ということにこそ、意味があるのではないかと思う。

本人がそう思った、感じたというのではなく、編集部が評価を与えていると捉えられるような表現の仕方ではまずいのではないか。

編集会議にて

A 真面目に読んでくれてるんやな。

B 我田引水はあかんという編集方針は持つていきたいわな。

C 「来るべくして来た」なんて、他の人から言われたら反発したくなりますよな。

D 大体、大倭が良い所だと思ってるんやな。どれくらい居るんかな。邑の外の方が良いと思ってる人が多いのちがう？

E 邑に住んだり係わったりする事情はそれぞれ違ふと思っけれど、結局、自分が自分に対して、結果をみたら「縁があつたんやなあ」と納得するような意味ではないかな。選民思想とかいうのでなくて……。

E 今後、このように皆さんにいろいなる意見を寄せてもらえると嬉しいですね。

A W T C 日誌

3月11・13日 栃木の中野英樹さんが大倭会館で「作陶展と即売会」を行い盛況でした。奥さんの聖子さんと共に初めて息子の道大君も来邑。

3月13日 大倭会主催の裸会。引き続き有志が勉強会。

3月15日 大倭神宮月次祭。

杉本順一さんは、大倭出版局の仕事として、法主様撮影の映像フィルム記録をDVDに移し替える作業のテストをしました。

3月17日 大和郡山市の栗田さんが娘の辻中さん母子と来邑。

3月20日 第282回大倭会文化行事で、飛鳥坐神社を訪ね、旧丹生川上神社の建物を移築したという社殿の前の階段に腰を下ろして、87代目という宮司さ

んの大らかな神さん談義を聞いて古代の空気を感じました。参加者は大人40人、子供5人。中野英樹さんもこの日まで残り、檀原の伊藤克夫さんは子供と自



転車で、舞鶴の藤本宏秋さんも一家4人で参加。天智天皇が作った水時計の仕掛けだという水落遺跡を経て、甘樫丘の麓まで行きお弁当を食

べた後、解散しました。

杉本順一さんの話「飛鳥坐神社から帰り際、社頭の鳥居を出る数段前に来た時、ふいに「ツチヲ サワツテクダサレ」とのこと。その意味を考える前に、階段左の苔むした地面に手を当てる挨拶をしておきました」。

3月23日 大倭大本宮月次祭。午後4時から、大倭会館で大倭会幹事会。平成16年単年度では赤字決算となつたとのこと。皆さん、大倭会に参加しませんか！

3月24日 野草社の石垣夫妻の子供、倭加子さんと飛鳥君の姉弟が来邑。二人にとつてあじさい邑は産土です。もう大人の話をする年頃になりました

3月25・28日 大橋留利子さんと家利君が交流の家泊。家ちゃんも昇ちゃんをよく覚えてくれていて、もう昇ちゃんを越える背丈になりました。

3月26日 大倭会館で、「あじさいの箱」の総会。EM関係の仕事がされているという畳谷綾さん(且田容子さん長女の友人)に名古屋から来てもらつてお話を聞きました。(7頁記事参照)

3月27日 午後、交流の家で「NPO法人むすびの家」の理事会が開かれました。4月2・3日 本紙編集部では、ネット編集部員(鶴)の地元である舞鶴方面へ旅行しました。

家族も一緒に気楽にという主旨でしたが、そうばかりも行かなかつた出来事については、また紙面を埋めるネタにする予定。4月6日 大倭神宮月次祭。4月8日 午前11時より須佐緒祭が行われ、続いて拝殿の底で園遊会。今年は折しも柳も青く桜、ツツジは満開の眺めでした。

4月9日 午前10時から奈良パークホテルで邑交會。大倭草創の頃から「縁の深い、森下糸さんが帰幽されました。享年94歳。夫の故新蔵さんは大倭会の前の「すさのお会」会長。夫妻は大阪でうどん店を閉めた後、邑で生活し開設当時の菅原園の厨房で仕事もされました。矢追家麻呂教長さんを祭主に大倭会館で、10日夜7時半より前夜祭、11日午後1時より帰幽祭が執り行われました。

教長さんの挨拶「森下のおばちゃんには、小さかつた頃からいつも気にかけてもらつてお世話になりました」。

4月10日 裸会。入学・卒業 吉田優花ちゃんが幼稚園に、吉田彩夏ちゃんと築林飛翔君が小学校にそれぞれ入学しました。

大倭安宿苑では4月1日 46名の職員が採用や異動の辞令交付を受けました。矢追明孝さんが大倭産産株を辞し須加宮寮副施設長に就任。(菅原園)

3月31日 長年に亘り勤務されていた熊田義見さんのお別れ会を新館で行いました。菅原園は退職されても、「クマさん」と大倭の付き合いは変わりませぬ。(須加宮寮)

3月30日 作業活動参加者の作業納め会。それぞれが希望のプレゼントをもらいました。(長曾根寮)

3月22日 ボランティアさんへの感謝会を催しました。(八重垣園)

3月23日 俳句クラブ。「早春賦奏でし友は百一歳」「朝寒やもう梅林は見頃とか」

ATM i C

* 月次祭(大倭神宮) 5月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。
* 大倭会主催第三三八回裸会 5月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
* 月次祭(大倭神宮) 5月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮) 5月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。